

日本キリスト教団藤沢教会 2021年7月4日

マタイによる福音書 4:12~25

おはようございます。さて、私たち日本人にとっては直接関わりのあることではありませんが、今日は、アメリカの独立記念日です。クリスマス、サンクスギビングデーと並んで、アメリカ人が大事にしている祝日ではありますが、詳しくは他に譲るとして、彼らがこの日を特別に大事にしているのは、「そのときから」アメリカの国家としての歴史が始まったからです。そして、このことはまた、記念日というものが、私たちがこうして生きているということとそれだけ深い関わりを持っているからです。つまり、記念日を覚え、人がその日を祝うのは、私たちの思想信条などの問題ではなくて、出来事が生じた「そのときから」自分と関わる大切な何かが始まったということです。ですから、多くの人々が誕生日、結婚記念日などを大切にしているのはそれゆえのことであり、また、私たち信仰者が、そこに受洗日や愛する者の召天日を加えるのはそのためです。そして、それは、その人の人生と、ある意味で記念日があるままイコールな出来事でもあるからです。

従って、それは、私たちの人生が高尚なものばかりで彩られてはいないように、つまらない話も必要ななんだろうと思います。そして、それは、教会の歴史も同じです。むしろ、私たちが不要だと思うものが逆に大事になってくることもあるのです。ですから、そう考えるならば、私たちが自由に好き勝手に振る舞っているように見えても、常に何かに規定されているのが私たち人間でもあるのでしょう。それゆえ、そもそもの始まりを大切にしている教会も、また、私たち信仰者も、そういう意味で、自分好みに歴史を築いてきたわけではありません。ですから、そう考えれば、過去を振り返り、私たちの歴史が私たち好みの素晴らしいものではないのは当然のことです。大事なことは、好ましいことも好ましくないことも、そのそれぞれをあますところなくきちんと後世に伝えることです。そして、そこに現されているものが私たちの信仰の姿勢でもあります。ですから、この

姿勢は今日の御言葉においてもしっかりと貫かれていることです。

そこで、早速、御言葉に聞いてみますと、そこで真っ先に私たちの目に飛び込んでくることは三つのことです。まず最初は、17節に「そのときから」とあるように、ここからイエス様の救い主キリストとしての公生涯が始まったということです。そして、その次は、弟子たちの召命の出来事ではありますが、この出来事なくして教会も信仰も今日を迎えることはありませんでした。宣べ伝える者がいなければ、何事も始まることはないからです。そして、最後は、イエス様を中心とした弟子集団を核として、イエス様のお言葉を受け入れる人々が数多く起こされたということです。このことはつまり、イエス様の救いの出来事において、神様が先ずお求めになったことが弟子たちであり、そこに集められる人々であったということです。つまり、イエス様がその公生涯において先ず大事にしたことは人との出会いであったということです。ですから、神様が語り手とその受け手とを欲したということ、御言葉が理屈めいたことをまったく語ってはいないことはとても大きいことのように思うのです。また、それだけではありません。同じ境遇に立たされた者であれば誰もが期待するに違いないイエス様の癒やしと奇蹟であります。信仰的に正しいか間違っているかは兎も角として、困ったときの神頼みというところから、決して離れ得ないのが私たち人間でもあるのです。ですから、それを思えば、私たちが信仰の扉を叩くことも、また、扉を叩いた後にいつまでも止まり続けることも、このことを抜きに語りうるものではありません。それゆえ、この、そもそもの始まりにおいて、そういう私たちの弱いところを頭ごなしにイエス様が否定していないところに、神様の御心が現されているように思うのです。まただから、人が人を呼び、イエス様を核として教会が築かれることにもなったと御言葉も語るのでしょう。

しかも、それは、私たちが分かる分からないのレベルの話ではありません。神様が深いところから私たちに寄り添おうとしてくださっているということであり、それがこのイエス様の公生涯をもって始まったということです。このことはつまり、そこに現されている神様の御心によって形作られてきたものが私たちのこれまででありますし、また、この神様の御心によって築き上げられていくものが私たちの将来であるということです。従って、御言葉がイザヤ書を引用して「暗闇の中に住む民は大きな光を見、死の陰の地にすむ者に光が差し込んだ」と語ることは、神様とイエス様とがそれだけ私たち人間の直ぐ近くにいてくださっているということです。つまり、イエス様が人々との出会いを求め、その活動を開始されたということは、私たちにそのように直ぐ近くで光と希望を与えることがその当初からの目的であったということです。それゆえ、このイエス様との深い関わりの中で作り上げられる私たちの人生はイエス様のこの目的から外れることはありません。ただし、それを伝える上で御言葉がここで小難しい理屈を語ってはいないように、私たちが神様の御心に素直に聞いて行くためには、この場を支配している99%の喜ばしい出来事だけでなく、私たちがついつい見過ごしてしまふ、いや、そうではなく、敢えて見ようとしなない、見たくない1%の出来事をもしっかりとこの体に刻みつける必要があるのです。

そこで、もう一度、御言葉をよく見ていきますと、ここでの出来事において、私たちの目を引くものは、すでに申しました三つの喜ばしい出来事でもありますが、ただし、そのそれぞれを貫いていることは私たちにとっての嬉しい出来事ではありません。御言葉が真っ先に語るものは「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた」というこの事実であるからです。このことはつまり、イエス様が公生涯というこの積極的な働きをなすために最初に行った行動が、退き、身を隠すという消極的なものであったということです。従って、イエス様に従う私たちの人生も、そういう意味でこの積極性と消極性を兼ね備えているということで、それゆえ、私たちはこの事実を見過ごすわ

けには参りません。ですから、この積極性と消極性をどのように理解し、また、どのように自分の人生に位置づけるかが私たちの人生における大きな課題だとも言えるのでしょうか。ただ、御言葉は、私たちに向かって理屈めいたことを言わない代わりに、その答えについてもあまり多くを語ろうとはしていません。ただ御言葉を引用し、その上で、「そのときから、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、宣べ伝えはじめられた」と語るだけなのです。

ですから、そこで単純に考えれば、イエス様が退き、身を隠したことは、すべては救いの出来事を伝えるため、つまり、大義に生きようと決意されたのがこの時のイエス様であったということです。しかし、そう単純に答えを出してしまっているのでしょうか。それは、大義を引っ張り出すことはとても分かりやすいことではあるのですが、それが、退き、身を隠すということの消極性を誤魔化すものであってはならないとも思うのです。なぜなら、この1%の誤魔化しは、99%の喜びを半減させるだけでなく、すべてを台無しにしかねないことでもあるからです。それは、大義のためには、私たちもヨハネの立場に身を置く可能性があるということにもなりますし、このことはつまり、どれほどの喜び、どれほどの恵みに与ろうとも、私たちはイエス様から見捨てられる可能性があるということにもなるからです。ですから、このそもそもの所で語られている積極性に暗い影を落としているのが、この1%のイエス様の消極的な態度であり、そして、それがこうして現に形として表されているわけですから、それは、私たちの人生において、ないことではなく、あり得ることでもあるのです。ましてや、私たちのほとんどは、イエス様の奇蹟を体験したことはありません。このことはつまり、祈っても祈っても、その願いが一向に聞き入れられないということは、私たちがイエス様から見捨てられたということにもなりかねず、従って、この1%の消極性をどう見るかということの方が、その後記されている99%の喜ばしい出来事よりもより重要であるということです。

そこで、皆さんと一つ確認したいのですが、それは、イエス様が退き、身を隠したという、イエス様のこの消極性に気づかされたとき、私たちの多くが不安を

感じるのはどうしてなのでしょう。それは、いつも共にいてくださっているはずのイエス様が、この「私」の側にいないという経験を、私たちが一度ならず二度三度と経験したことがあるからです。それだけではありません。イエス様には堂々としていて欲しいし、陽の当たる場所を歩んで欲しい、それがイエス様に従う私たちの願いでもあるからです。だから、私たちは退くというこの消極的な一面を許すことができない。許すことができないから、イエス様との関係性にいずれピリオドが打たれやしないかといつもビクビクしてしまう。それはちょうど私たちが終末をこの世の終わりとしてのみ理解し、そのとき裁かれやしないかとビクビクするのと同じです。まただから、余計に、私たちは、イエス様には陽の当たる場所を歩んでいただき、この弱い、悲しい、愚かで醜い自分を陽の当たる場所に連れ出していただきたい、そう願ってやまないのだと思うのです。ですから、その私たちの一番の願いはイエス様にスーパーヒーローのように振る舞っていただくことです。捕らえられたヨハネを救い出し、手向かう敵をバツバツと切り倒す、私たちが一番求めることは、そういうイエス様の勇ましい姿なのではないでしょうか。

ところが、イエス様はそうではなかった。私たちが思い、願うような救い主の姿をもって事を始めるのではなく、むしろ、私たちにとって不愉快とも思える振る舞いをなし、事を始めるのです。ですから、私たちがイエス様のこの退く姿に躓いてしまうのは、そこにイエス様の誤魔化し、私たちに向けられたイエス様の不誠実な態度を感じるからなのかもしれません。けれども、それは、私たちがイエス様を自分のイメージ通りのイエス様であって欲しい、そうでなければならぬ、といった、私たちの思い込みが私たちをしてそう感じさせているようにも思うのです。つまり、私たちのイエス様に関してネガティブな感情を持ってしまうのは、私たちが素直にイエス様のことを見ていないところに最大の理由があるということです。ですから、ですから、そういう意味で、ここでイエス様が先ず以て退かれたことはとても大きなことのように思うのです。なぜなら、イエス様が最初に向かった場所が、光と闇が、生と死が、そのそれぞれがせめぎ合う場所でもあるからです。しかも、そこにスーパ

ーヒーローのように乗り込むのではなく、私たちと同じ生身の体をもって向かったのが私たちのイエス様でもありました。ですから、イエス様が先ず退かれたということは決して消極的な意味でのことではありません。イエス様が不誠実であるからではなく、その反対に生と死との狭間で苦しむ私たちの元に積極的に出て行かれたということであり、従って、その後記されている弟子たちとの出会い、病に苦しみ人々との出会いは、何よりもその後のイエス様の活動のすべてが、低きに降らんとするその積極性に基づいて成されたものでもあるのです。

ところが、このイエス様の積極的な態度を私たちはどうしても消極的なものと感じてしまう。それだけでなく、私たちが生きるこの場所に来てくださったイエス様のことを、私たちが不誠実で傲慢な方だとさえ思ってしまう、それについて皆さんは、いや違う、私は違う、そんなことは絶対ないと、胸を張ってそう答えることができるのでしょうか。少なくとも、私にはその自信はありません。三度イエス様を拒んだペトロ姿と自分とがどうしても重なって見えてしまうからです。ですから、ここでもそうですが、まただから私たちは自分の関心のあるところから御言葉に聞いていこうとするのでしょうか。ここでのこと例えば、牧師は弟子たちの召命の出来事、信徒は自分が困ったところに手をさしのべてくれる奇跡的な出来事、私たちはどうして自分の関心のあるところ、見たいところからイエス様のことを理解しようとしてしまうのです。けれども、その反対に見たくないところを見せられ、そして、ここでは、繰り返し、従うということが語られているのですが、見たくないものを見るように強いられたとき、そこでの私たちの反応は火を見るよりも明らかです。自らの不遜な態度をイエス様の所為にし、不誠実で傲慢とのレッテルすら貼ってしまうのです。それは、私たちがイエス様の立っているところに立っていないからであり、イエス様が退き、隠れたところを私たちが積極的に肯定できないのはそれゆえのことでもあるのです。けれども、どうでしょう。私たちが現にいるところ、いたいと思う場所は本当に私たちにとっての理想的な場所なのでしょうか。

私たちが生きるこの世界は、確かに日の当たる場所とそうでない場所とに分か

れているように見えますし、そして、それが私たちの置かれた現実でもあるのでしょう。だから、私たちは闇を恐れ、光の当たらない場所を毛嫌いするのです。それは、そこで命を繋ぎ、育むことはできないとそう思っているからです。そして、私たちはいつ何時この闇に自分が転落するか分からないと思っている、それゆえ、それがますます私たちを不安にさせることにもなるのです。だから、常に光の当たる場所に私たちを置いてくださることをイエス様に願ってしまうことにもなるのですが、そこで、そうならないために私たちが考えることがここで繰り返し語られているイエス様にお従いすることです。闇への転落を恐れる私たちはイエス様にお従いするのをまるで魔除けのお守りのように考えているからです。けれども、イエス様がその公生涯を始めるこの時、御言葉が私たちに伝えてくれることはそういうことなのでしょう。もちろん、だから高をくくっていれば自動的に光の中に導かれるということではありません。私たちの身勝手な思いに寄り添うお方がイエス様だとは御言葉は言ってはいないからです。ここで繰り返し求められている従うということは、従っているふりをすることでもなければ、口先で従っていると言っすむことでもないからです。従うということは、イエス様と共に生きることであり、イエス様がいますところに私たちが一緒にいるということです。ですから、そういう意味で私たちに先ず求められることは、このイエス様のいますところに身を置くことです。

弟子たちの召命の出来事も、そして、大勢の群衆を癒やされたイエス様の奇跡についても、御言葉はくどくどとあれやこれやと説明を加えてはおりません。イエス様と出会った人々が素直にその胸に飛び込んだ様を描くだけなのです。それは、イエス様の胸に飛び込むことが私たちの信仰であり、そして、そこに生き、そこに共にあるのが私たちの一生でもあるからです。ですから、そこは光と闇とに分かれた世界ではなく、イエス様と神様の思いとがあふれ出る光と闇とを繋ぐ場所です。それゆえ、私たちは闇を恐れる必要はありません。闇は闇としてありながらも、イエス様はどんなときにも私たちと共にいてくださっているからです。まただから、私たちはイエス様の胸に素直に飛び込むことができるのです。

イエス様を見つけたことのうれしさ、その喜びが私たちをしてそうさせる、私は、一泊保育から戻ったばかりの子どもの姿を通してこのことを教えられたように思います。

一泊保育は多くの子どもたちにとって初めて親元から離れる不安に満ちた出来事です。けれども、自分が少しだけ大きくなったと実感できる恵み深い出来事でもあるのです。だから、子どもたちも頑張るのですが、けれども、それは相当の無理をしてのことです。いつも一緒にいた家族と離れることは子どもたちにとってかなり負担の大きいものでもあるからです。ですから、一泊保育は子どもたちにとっては光と闇とを同時に経験する出来事だとも言えるのでしょう。けれども、その子どもたちが楽しく一泊保育を過ごせるのは、職員たちの働きの大きさに止まらず、やはりそこにイエス様が共にいてくださっているからだと思うのです。まただから、バスから降りてお母さんを待っていて、お母さんを見つけるやいなや、ある子が取った行動を見て、ああそういうことなのかと、私の中で今日の御言葉とその出来事がすぐにピンと繋がったのです。もうお分かりのことと思いますが、ある子がお母さんの胸に一目散に飛び込んだのです。それは、その子にとってそこが自分を生かす場所であるからです。そして、それは私たちとイエス様との関係においても同じことが言えます。どこにいても、どこにあっても、イエス様は私たちと共にあり、その生涯を共に歩んでくださっている。そして、そこに私たちに向けられた神様の御心が置かれているのであり、そのためにイエス様を神様はお遣わしになられたのです。それゆえ、そこに生きる私たちはこの日もまた神様のみ声を聞いている。それも、遠いところからではなく、神の子であるイエス様と共に神様の声を聞いている。それがこの時の私たちであり、それが、この時に始まったことでもあるのです。しかもこの恵み、この幸いの中にこの日も私たちは飛び込むことが許されているのです。それは、そこにイエス様と共にある私たちの新しい歩みがあるからです。ですから、今週も、イエス様の胸の中から新しい歩みを始めたいと思います。祈りましょう。